

概要報告

実施期日	7月29日(火) 【午後】
部会名	小学校 総合的な学習の時間部会

テーマ 『協同的・探究的な学習に自ら意欲的に取り組む子どもの姿を目指して』

提案概要

5年生総合「食を通して」というテーマで、このクラスでは、給食の残食が多いことに着目し、「コンポスト」についての導入から話し合い、全校の残食を調べることにした。その結果、自分達のクラスの残食がとて多いことに気が付き「残食ゼロ」を目指して取り組むことになりました。成果が出始め、全校に向けても残食ゼロに向けての発信をしようとした矢先に、市内ではノロウイルスが流行し、せっかく考えた解決策を実行することができなくなった。しかし、教師的的確な資料の提示や、話し合いによって、これまでの活動を振り返り、工夫して何とかこの活動を継続したいという子ども達の気持ちが高まり、食にまつわるテーマに分かれて調べ、発信することになった。4年生への発表や、全校に向けての放送、ポスターの掲示など、活動は広がり、深まっていた。子ども達のやる気も最後まで持続し、自信をもって生き生きと取り組む姿が見られた。

質疑概要

Q1 発信テーマを決めた際の様子をもう少し詳しく聞かせてもらいたい。

A1 新聞記事や道徳の授業などから、子ども達に考えさせ、興味関心を広げていった。

Q2 発信のテーマをどのようにしてまとめていったのか？

A2 クラス一斉に、黒板でウェビングをしながら、先生が主導で丁寧にテーマを決め、モチベーションを持たせた。

Q3 この学習はクラス独自で行ったのか？ 学年での関わりはあったのか？

A3 「食を通して」というテーマは学年で統一したものだだったが、その後の展開はクラスそれぞれになった。

Q4 4年生に対する発信というのは、学年で行ったのか？ A4 学年ではしていない。クラスで行った。

Q5 子ども達が発信テーマ毎に分かれて、まとめあげるまでに、どんな活動があったのか？

A5 外に出てインタビューをしたり、保護者向けにアンケートを作って配付し、協力してもらったグループもある。

研究協議概要

○総合が盛んではなくなってきたと感じる。時間数減、地域や家庭の協力が得られにくいこともある。「完食」が「食育」ではない。「もったいない」の気持ちを育てることが大切。提案者の先生のアプローチの仕方がよかった。

○各校の実態として、行事との兼ね合い、授業の補足、教師主導、時間の制約など、色々の悩みがあるようだ。

協議の柱①について

○ 教師の着眼点が大切。子どもに根付いているものであること。また、教師の根気が大切だと思う。

○ 各校の取り組みと、題材をどう探すか、情報交換をした。子ども達中心に、子ども達から出たテーマ、やる気が多方向になると、大変だという意見が出た。

○ 「地域との関わり」は、意欲持続のポイントとなる。また、作業や体験を取り入れることも有効。

○ カリキュラムが決まっても、そこから広がるようなものを選ぶことが大切である。子ども達に任せすぎてしまうと、途中で行き詰ってしまうこともあるので、ノートなどでのやり取りをして、進めていくことが大切。

○ 地域の特色、学区の自然、地域資源を生かした題材がよい。安全面、時間の関係で、子ども主体にしにくいなどの悩みもある。

協議の柱②について

○ 「まずい」「どうしよう」となったとき、根がしっかりしていたことと、教師のアンテナ（適切な資料の提示など）によって、切り抜けることができたと思う。

○ あるクラスでは、6年で鎌倉について学ぶ際、インタビューをしようとしたところ、平日で観光客がいなくて困ってしまったとのこと。一方、土日は活動しにくい現状がある。別のクラスでは、疑問解決の手立てとして電話を活用したところ、意欲アップにつながった。

○ 海の問題、放射能の問題など、色々あるが、終着点がきちんとあれば、大丈夫。

○ カリキュラムの組まれている学校もある。決まっても、子どもというのはそれなりの意欲をもって取り組める。

ものだと思う。子ども達の集団が興味を持っていて、先生がアドバイスできること、見通しがもてることであれば、持続できると思う。体験活動や作業もポイントになる。異学年に発表するというのも自信になってよい。子ども達は自分がやっているつもり、でも実は全ては先生の手の上で、できているとよい。

まとめ概要

(助言者 教頭)

- 意欲的、というより主体的だったと思う。
- 特徴が3つあった。
- 1つめは、年間計画が柔軟に計画されていること
具体的な活動を想定しないといけないが、色々はアプローチができる。
- 2つめは、身近な問題提起であること
子ども達が自分達で活動しているように見えて、実は先生が仕掛けをし、安全を見守っている。学校の地域性、保護者の傾向などを含め、クラスの様子をきちんと見取ることが大切。
単元計画を見ると、4つの段階がある。
①態と課題の把握、②考察、③行動、④まとめ・発信
これは、指導要領解説13ページのスパイラルを意識して取り組んでいると言える。
- 提案者の先生の課題の出し方が上手である。
「コンポスト」から入ったところがよかった。そこから、「なぜ存在するのか？」という疑問に進んでいる。
- 「考える」という言葉はそもそも「かむかえる(彼己交える)」からきている。思い付きを羅列するのではなく、相手や材料があつてこそ「考える」である。
- 考える材料を提示していることがよい。
- 3つめは、他教科、他領域とのリンクがされていること
他教科とのリンクが効果的に行われていた。
- ノロウイルスの時には、提案者の先生も本当に困っていた。
総合は、今日的な課題、タイムリーなだけに、リスクもある。しかし教師がその負荷をうまく工夫することで、逆に、子ども達の学習が広まったり深まったりして「災い転じて・・・」ということにもなる。
- 異学年集団をうまく使ったところもよかった。言葉を噛み砕く必要があるため、よい言語活動になる。元気、活発で、何が飛び出すか分からないような子ども達なのに、成果が大きかった。

(助言者 指導主事)

- 提案者の先生がとても熱心にされていた。平成10年に始まった総合は、平成23年の改訂の際に「探究的」「協同的」という言葉が付け加わった。
- 給食は子ども達にとって身近な課題で日々継続していくことができ、また学校全体への広まりもある。
- 途中が、ハウツーになっていないかという指摘があつたが、「情報の収集」から「整理分析」そして「結論に気づく」という流れがあつた。子ども達にテーマを投げかけていれば教師は安心してしまうこともあるが、そうすると子ども達も「何となく」調べて学習をするだけで、課題についての意識は失速してしまいがちである。
テーマはぶれていないか、ねらいが不明確になっていないかなど、課題の本質を理解しているのか、思考の深まりはあるのか教師は常に把握することが必要。目標がぶれてくると、何をしたらよいか、分からなくなってしまう。児童が増え、課題意識を継続することが難しくなったり、深まらなくなつて失速しまつたりする。「協同」とは、「メンバー全員が同時に、明確な目標を目指すこと」により深まるのである。視覚的に課題を把握できるようにするなど個への配慮を取り入れながら、教師は目標への手立てを組むことが大切である。
- 各学校に配付されている「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」の冊子はとても具体的で使いやすいので是非活用してほしい。